The Shirayuri Research Center for Language and Literature アウリオン
Αυριον

発行：白百合女子大学言語・文学研究センター　July 2023　Vol.41

CONTENTS

P.01　センター長コラム
P.02　新任運営委員のご挨拶
P.03　2023年度言語・文学研究センター構成員一覧
P.04　言語・文学研究センター活動報告
P.07　2022年度の活動報告、センター員活動報告
P.08　プロジェクト活動報告
P.11　お知らせ

古典籍を楽しむ　Ⅱ

言語・文学研究センター長　室城　秀之

私が長年研究している『うつほ物語』（『源氏物語』に先立って成立した、わが国初の長編物語です）に、相手もわからずに懐妊した女主人に、仕える嫗（おばあさん）が、女主人に自分が針の夢を見たという話をして、「針の夢を見て生まれた子は親孝行の子になりますよ」と言って励ます場面があります。その相手は、時の太政大臣の御曹司の若小君（藤原兼雅）でした。この女主人（清原俊蔭の娘）が生んだ子がこの物語の男主人公の藤原仲忠です。後に、仲忠は母の俊蔭の娘ともに兼雅に引き取られて、出世してゆくことになります。

今では、夢占いをする書物もあるし、インターネットでも夢占いができます。平安時代にも、夢占いをするプロ（夢解き）がいました。この嫗は、自分が見た夢を夢解きに話して占ってもらったと言います。生まれた仲忠は、実際に母に孝養を尽くします。この話を読んで、平安時代にはどのような夢占いがあったのだろうかと興味を持ちました。

そのうちに、江戸時代に夢占いの本がいくつも出版されていることを知り、少しづつ買い集めて、数冊手に入れました。前回紹介した『小野篁歌字盡』と同じようにかなり痛んだかわいそうな本です（『小野篁歌字盡』は、あの後メルカリで三冊購入できました）。残念ながら、針の夢を見て生まれた子が親孝行の子になるという夢占いは見つかりませんでしたが、買い集めた夢占いの本を読んでいると、それなりに楽しい時間を過ごすことができます。今回は、そのうちの一つ、比較的きれいなものを紹介します。『増補夢合長寿宝　全』という、江戸時代末期に出版された本です。そのなかの、鶴と亀の夢を見た時の夢占いの部分です。句読点をつけてあげましょう。漢字と仮名は現代のものに改めてあります。

こちらは、『夢合長寿鑑絵抄』という本で、絵がたくさん入っています。この挿し絵は、人の格好をした六種の家畜（牛・馬・羊・豕・犬・鶏）と物語りをするという夢の様子を描いたものです。

○舞鶴を見れば、大によし。目上の人に取立られて、立身出世するなり。そのうへ、寿命長久にして、子孫はんじやうなり。

○亀をみれば、何事に用ひても、仕合よく、永く続きて、悦びあり。但し、泥亀鼈甲のたぐひは、一たびは栄ふるといへども、殊々より後へ衰ふるの理あれば、これをよく慎み行ふこと肝要なるべし。

新任運営委員のご挨拶

この世は知らないことばかり。無知であることを恐れずに。

国語国文学科　講師　萩野　了子

今年度、言語・文学研究センターの運営委員を担当させていただきます、萩野了子です。

私は、奈良時代から平安時代初期にかけての和歌、特にその修辞技法の表現の変遷について研究を行っています。随分と古い時代の作品を研究対象としておりますため、現存する文献も数少なく、当時のことを正確に窺い知ることもままならないのですが、和歌一首一首の表現分析の積み重ねの先に、ほんの一欠片、古代の歌人達の心の中の営為が垣間見える瞬間がとても感動的です。

文献が少ないとはいえ、万葉集の中に見られる土地や、古事記日本書紀に見られる神々が祭られている神社など、国内を巡ればいたる所にその姿を見ることが出来ます。特に神社仏閣などは、当時そのままの信仰とは言えなくとも、人々が思いを寄せる場所、聖地として今もなおそこにあるのですから、これほど尊いことはないと思います。

国文学の勉強をしているのですから、名所旧跡歌枕は網羅的に訪れて然るべきなのですが、持ち前の出不精がこれまでそうさせてくれませんでした。これからは積極的に旅をすることを心がけようと思っています。

特に身につまされたのは、越中守として現在の富山県に赴任していた大伴家持が、現地の海の景を詠んだ歌を巡り論文を書いた時のこと。幸い私の文章には残っておりませんでしたが、自分の中で実に勝手な海のイメージを思い浮かべながら表現分析を行っていました（日本海にはあり得ぬような、実に凪いだ静かな海です）。後日現地の荒ぶる海岸に佇み「やってしまった…。」と頭を抱えました。今現地を訪れて、これを俄に古典作品の情景にそのまま重ねることも危険ですが、例えばその場の光や空気、音を味わい、インスピレーションを受けることは決して無駄なことではなく、寧ろ必要不可欠のことと感じました。

先日は、ふと思い立って、久々に法隆寺を訪れました。夢殿の秘仏救世観音のご開帳のタイミングでした。ガイドの方にお願いして解説を受けながらの拝観は、これまで目に見えなかったものを沢山感じ取ることが出来ました。「柿くへば」でお馴染みの鐘楼の側、西円堂北西の祠には「賓頭盧尊者」像がおられます。撫で仏のイメージが強い「びんずるさん」ですが、ここでは参拝者が仏像を撫でるのではなく、仏像がこちらを撫でてくれるということでした。有名な話だったかもしれませんが、不肖の身、これまでの法隆寺参詣では、こんなに面白いものに全く気がつきませんでした。

どんな時にも知ったような顔はせず、教えを請い求める姿勢が、自分の力のみでは到底気づくことの出来ない世界を体験させてくれるのだと、改めて痛感させられました。

今日も今日とて、無知を恐れず「これは何ですか」「それはどんなものですか」と、方々尋ねて回りたいと思います。

賓頭盧尊者像の左手が取り外せるようになっており、おのおの自らの患部を撫でる。この左手でしっかり頭を撫でて来たので、ひとまずは安心である。

言語•文学研究センター活動報告①

◉ 言語・文学研究センター主催 ◉

2022 年度　談話会

よりそうことば よりそうこころ
―コロナ禍で学ぶ外国語

2022年11月17日（木）16：20～17：50

講師：安部玄太郎 氏（マンションコンシェルジュ）

語学の先に、こういった道もあるのだと参加者の皆さんは思われたのではないでしょうか。

マンションコンシェルジュとは、大きいホテルのフロント業務のようなイメージだと表現されていました。例えば、タワーマンションのセキュリティ面を考慮すると直接のインターホンはないため、ゲストの訪問対応として居住者への取り次ぎを一人ひとり行っているそうです。また、荷物の引き渡しサービスやタクシーの手配、居住のお客様が長期不在の時は植物管理やペットの餌やりなども行っているとのこと。「ペットシッターは面識がないから、安心して預けられる安部さんに」というメッセージをお客様がくださったそうで、安部さんがいかに多岐に渡る業務に従事する中で細やかで行き届いたサービスを提供し、信頼を得ているか、伝わってきます。共通言語の者同士でも信頼関係を築くことは難しいはずです。ましてや、外国の方を相手にとなると双方にとって言葉はまさに「壁」になるとどうしても思ってしまうものです。しかし、障壁どころか言葉が自分の味方になり、さらには相手に寄り添う心そのものを体現している様子が、安部さんのお話から伺えてきます。

「ネット予約はできても電話では難しい」「外国人専用医療ダイヤルはあるけれども、やはりイレギュラーゆえに難しい」その間に入って通訳のような役目を果たす場面もあるそうです。このようなお客様の要望を叶えるまでの過程や、日常生活でギャップを感じた日本文化・慣習にかかわる質問をされることも多いようで、そういった会話の中では、質問に対する簡潔な返答と相手のスタンスに合わせた対応を心掛けているとお聞きしました。相手のスタンスに合わせた対応とは、具体的には使用言語・使用単語のチョイスにあらわれていて、安部さんは必ず日本語で話しかけ、会話が始まったら使用言語を相手に合わせるのだそうです。使用単語の選択の基準も単純明快です。複数の意味がなく、聞いたら誰でも分かる単語を優先していて、それは、高度な言語テクニックをひけらかすことが目的なのではなく、円滑なコミュニケーションが目的だからだとお聞きし、合理的で洗練された考え方とそれを実践している忍耐に感銘を受けました。

世界中を旅した思い出の写真とともにお話しくださる様子

そして、今回の談話会では〈今後の外国語学習の必要性について〉〈外国語を学んでその先へ〉のトピックで多くの参加者が勇気づけられたことと思います。

昨今話題の AI 導入に関しては、現場では補助としての使用にとどまり、完全な依存には至っていないとのこと。間違いが起こった際の責任所在不明の問題が残っているからです。また、常にオンラインでなければ人工知能の能力を活かしきれないと説明されていて、オンライン環境を要求する実情に言及されていました。最終チェックやケアは人力で行っている現状なので、外国語を学ぶことの必要性は揺るがないのではないでしょうか。また学習の方法として触れられた資格勉強は、実用英語に相反するものではなく一続きにあるものだとお話されていました。学習の初期段階に有効で、基礎力養成の橋渡し的な役割があると感じているとのこと。頑張りを数字で示せるという点では説得力が出て、土台として役立てられるので、万能ではないが取り入れるべき方法としておすすめされていました。長期的に学習を続けるには自分の性格の強み弱み、生活のサイクルに即したやり方を見つけることが大切だともご教示いただきました。

悩んだ時はなぜ語学をやっていたか、原点に返るそうです。語学で生まれるチャンスの波に乗ることで、長い目で見たときに後悔が人生の中で減るとのメッセージや、お互いに母語同士で会話をしていて楽しかったという大学時代に訪れた海外での交流エピソードにも、互いに寄り添っていく心模様が語学の先にはよりクリアに見えてくることが暗示されているように思いました。

（本センター準研究員　齋藤　花琳）

言語・文学研究センター活動報告②

杉並区立中央図書館＆言語・文学研究センター共催

ファンタジーとイギリス児童文学：『不思議の国のアリス』が生まれるまで

第40回　2022年12月10日（土）14:00~16:00

講師：水越あゆみ 先生（本学文学部英語英文学科教授）

杉並区立中央図書館との共催文化講座「知の散歩道」が、2022 年 12 月 10 日に開催されました。今回は、本学英語英文学科の水越あゆみ先生が登壇して、「ファンタジーとイギリス児童文学：『不思議の国のアリス』が生まれるまで」と題した講演を行いました。

フランスの文学史家ポール・アザールは、「英国ほど児童文学の中に不滅の国民性を刻み込んだ国は世界中どこを探してもない」(1) と述べています。しかし、「児童文学」というジャンルがイギリスで登場するのは 18 世紀半ばであり、それまでの子どもの本の多くは「努力と勤勉が人をいかようにでもする」といった宗教的倫理観に支えられた道徳的・教訓的なものや、啓蒙的な「お説教臭い」作品が中心でした。

1865 年にはルイス・キャロル Lewis Carroll（1832 ~ 1898）の『不思議の国のアリス』が発表されました。幼い少女アリスが白ウサギを追いかけて不思議の国に迷い込み、しゃべる動物や動くトランプなどさまざまなキャラクターたちと出会いながら、その世界を冒険するさまを描いています。この作品は、子供たちだけでなく、大人も楽しむことができる魅力的なファンタジーであり、それまでのお説教臭さを笑い飛ばすとともに、子どもたちの自由な想像力とユーモアやノンセンスに溢れた夢の世界を描いたことで、児童文学の金字塔と見なされています。

水越先生は、『不思議の国のアリス』の文学的価値を解明するために、イギリスの児童文学の歴史や代表作品を概観・紹介したうえで、18 世紀末から 19 世紀半ばにかけて人気作家であったマライア・エッジワース Maria Edgeworth（1767 ~ 1849）が 1796 年に発表した

作品集 *The Parent's Assistant*（親の手助けをする子供）を取り上げて解説しました。"The Birthday Present" という短編小説では、ロザモンドという名前の女の子が、いとこのベルの誕生日に高価なプレゼントを贈り、寛大さを見せようとしますが、父親から「寛大さを見せるにはお金を贈るだけではなく、自分自身を相手に差し出すようなことをするんだよ」(2) と言われ、「真の寛大さ」についての教訓を学びます。

一方、『不思議の国のアリス』で登場した個性豊かなキャラクターたちの中には、「何にでも教えは見いだせるものじゃ、気づきさえあればな」(3) と教訓が大好きな公爵夫人がいます。アリスと再会した公爵夫人は「そしてそこから学べる教えとは―『意味が決まれば、自ずから言の葉も決まる』」(4) というノンセンスな教訓を口にします。イギリスには、「小事に怠りなくば、大事は自ずから成る」(5) ということわざがあります。作者のキャロルはことわざの pence を sense に、pounds を sounds に巧みに変換し、笑いを誘う言葉遊びを活用することによって、読者の子どもたちをヴィクトリア朝社会の退屈な道徳的空気から解放しようとしています。水越先生は、原作の言葉遊びやパロディをわかりやすく解釈して、参加者に深い印象を残しました。

講演の最後に質疑応答の時間も設けており、ヴィクトリア朝の識字率や大英帝国の海外植民地政策との関連性など、多くの参加者から積極的な質問が寄せられました。水越先生と参加者の間で活発な議論が交わされ、大変有意義な講演となりました。

(1) ポール・アザール『本・子供・大人』矢崎源九郎訳（紀伊国屋書店、1957）、188 頁
(2) It is not only by giving away money that we can show generosity; it is by giving up to others anything that we like ourselves.
(3) Everything's got a moral, if only you can find it.
(4) the moral of *that* is –'Take care of the sense, and the sounds will take care of themselves.'
(5) Take care of the pence, and the pounds will take care of themselves.

（本センター助手　姚　紅）

言語・文学研究センター活動報告③

言語・文学研究センター主催

2022年度　第2回講演会

デジタル・ヒューマニティーズと学問の新しいかたち

2023年2月20日（月）16:30～18:00
講師：平尾桂子 先生
（上智大学大学院地球環境学研究科教授）

去る2月20日（月）、上智大学大学院地球環境学研究科教授*の平尾桂子先生を講師にお迎えし、講演会「デジタル・ヒューマニティーズと学問の新しいかたち」が開催された。

当センターの講演会では、文学や芸術作品をメインテーマに据えるのが通常であるが、今回の講演会は、そうした狭義の分野にとらわれず、より総合的な〈人文学〉分野を〈情報学的手法を用いて考える〉場として企画されたものであった。この異色の企画に、教員からの参加も多く見られた。

ご講演は、デジタル・ヒューマニティーズ（以下、DH）の概説から始まった。DHとは、「紙媒体を中心に展開されてきた人文科学の学術的伝統の上に、コンピューター技術によって可能になったデータの収集、分析、教育、出版のための新しい取り組み」（Burdick, 2012）と定義されている。実際には、人文学（ほか）諸分野と情報学とが融合し、相互に作用する学際領域のことをいう。

考えてみると、意識はしていなくとも、DHは意外にも身近な存在である。例えば、研究者であれば頻繁に利用するであろう各国国立図書館のデジタルアーカイヴもそのひとつで、これはデジタル化された史料をウェブ上で共有したものだ。データがオープン化されたこ

とによって、学術研究をする上でのさまざまな恩恵を受けられる。これまでであれば、わざわざ現地の図書館や文書館に行かなければ閲覧できなかった史料を、デジタル技術のおかげで地理的・時間的・金銭的な制限や負担を気にせずに閲覧できるようになったのだ。その結果、新たな研究成果を増やすことにつながっている。

さらには研究者という枠も越えて、市民社会にも研究成果を浸透させ、市民との新たな関係性を結ぶことにも貢献している例を平尾先生は紹介してくださった。

まずひとつめは、2011年に発表された「ヒロシマ・アーカイブ」で、これは被爆者の貴重な証言と原爆の記録を未来に遺すことを目的に、デジタル地球儀上に被爆者の証言をマッピングした「多元的デジタルアーカイブズ」である。被爆地・広島の実相を伝える貴重なものとして世界的にも注目されており、証言は英訳もされている。

もうひとつ、2017年より始まった「みんなで翻刻」という市民参加型プロジェクトがある。これは、専門的知識のいる古文書の翻刻作業（変体仮名や筆書きを一般人でも解読できるように活字に直すこと）を、AI技術の手助けを受けて一般市民もできるようになる取り組みだ。このサイト内では、すでに5,000人もの参加者によって、600万字もの資料の翻刻が済んでおり、もちろん翻刻済みのデータは原本と併せて一般公開されている。そのバラエティー豊かな資料群の数々を見ているだけでも非常に楽しめるものである。

こうした、より一般にも開かれた研究環境の実現を「オープンサイエンス」と呼ぶらしく、この考え方は近年注目を集めており、人文学においても今後は広まっていくと考えられているそうだ。先にも述べたが、DHはすでに幅広い領域で生かされており、それは学問の方向性を変えていくほどの可能性を秘めている。研究環境はすでに開かれているのに、これを使わない手はないだろう。

ご講演に続くフロアとの対話でも、平尾先生のご専門とする社会学分野へのご質問から、ジェンダーまで話題は多岐にわたり、非常に刺激的な会となった。ご参加くださった方々からは「デジタル・ヒューマニティーズという急成長中の領域について、新しい発見ばかりで大変興味深かった」というご感想をはじめ、ありがたいお声が多く寄せられた。

参考：国立情報学研究所ホームページ、「ヒロシマ・アーカイブ」ホームページ、「みんなで翻刻」ホームページ

（本センター助手　吉田　怜美）

＊先生の肩書は当時のものです。

2022 年度の活動報告

講演会

第 46 回講演会

2022 年 9 月 30 日（金）16：20 ～ 17：50
「「ジャポニスム」の問い直し：輸出陶磁器・仏教美術から 21 世紀の新局面まで」
講師：稲賀繁美先生
（京都精華大学国際文化学部特任教授）

第 47 回講演会

2023 年 2 月 20 日（月）16：30 ～ 18：00
「デジタル・ヒューマニティーズと学問の新しいかたち」
講師：平尾桂子先生
（上智大学大学院地球環境学研究科教授）

談話会

2022 年 11 月 17 日（木）16：20 ～ 17：50
「よりそうことば　よりそうこころ――コロナ禍で学ぶ外国語」
講師：安部玄太郎氏（マンションコンシェルジュ）

文化講座「知の散歩道」

第 40 回　杉並区立中央図書館＆言語・文学研究センター共催
2022 年 12 月 10 日（土）14：00 ～ 16：00
「ファンタジーとイギリス児童文学―『不思議の国のアリス』が生まれるまで」
講師：水越あゆみ先生
（本学文学部英語英文学科教授）

センター員活動報告

鳥羽「江戸川乱歩館」リニューアルオープン記念「乱歩フォーラム」報告

2023 年 5 月 22 日（土）

今年 5 月 29 日に三重県鳥羽市の「江戸川乱歩館」がリニューアルオープンいたしました。2021 年に起きた火災からの復興ということで注目も浴びており、オープンに先立ち 5 月 22 日に、乱歩館を運営する鳥羽商工会議所のホールに於いて「乱歩フォーラム」が開催されました。

基調講演は、金城学院大学文学部教授小松史生子氏の「調査結果から新たに分かった乱歩にとっての鳥羽」でした。鳥羽は乱歩にとって、若き日に鳥羽造船所で働いた地であり、『日和』という社内報を作成したり、生涯続く友を得た地でもありました。その友の中には、私が長年研究してきた岩田準一という人物も含まれます。

金城学院大学小松史生子教授と「江戸川乱歩館」にて。

後半では火災跡地や、岩田家から発見された貴重な資料の紹介もなされました。特に「江戸川乱歩と岩田準一の交流を示す資料」として、岩田が 1945 年 2 月に亡くなる直前に病院で書いた日記様のメモが紹介されたことが印象に残りました。このメモには平井太郎（江戸川乱歩）の名が書かれています。そして亡くなる数日前まで手紙を発信していたらしいことが見て取れ、実際にその資料の調査に携わり、資料を見ていた私でさえも、この資料を人々にこの場で紹介すること、そして会場の人々が関心を持ってくださることに改めて感動いたしました。

また私自身も、基調講演後のトークセッションに登壇し、岩田準一についてを中心に少しお話いたしました。乱歩の親友であるとともに、鳥羽の文化的交流の要の人物であった岩田準一について、少しでも地元鳥羽の方々に伝えることができていれば幸いです。

更に、フォーラムの一週間後に開館した、新しい「江戸川乱歩館」の展示につきましても、どの資料を展示ケースに入れるか、キャプションをどうするかといったことまで、開館直前までメールでの話し合いに参加させていただきました。リニューアルオープンに際し、研究者としてここまで深く関わる機会を与えていただけたことに誠に感謝しております。ご興味のある方は、是非鳥羽の「江戸川乱歩館」に足をお運びいただけましたら幸甚です。

（本センター研究員　森永　香代）

プロジェクト活動報告①

◉近代文学研究会◉

令和５年度前期の活動も引き続きオンラインではありますが、無事に開催できましたので報告します。使用したテキストは以下の通りです。

吉行淳之介「夏の休暇」
宮沢賢治「ポラーノの広場」
泉鏡花「人魚の祠」
夢野久作「きのこ会議」
住野よる「君の膵臓をたべたい」
遠藤周作『死海のほとり』
夢野久作「瓶詰地獄」
芥川龍之介「父」
瀬名秀明「ポロック生命体」
本谷有希子「異類婚姻譚」
本谷有希子「トモ子のバウムクーヘン」
田山花袋「少女病」
安岡章太郎「鷹章」
梅崎春生「赤い駱駝」

例年にくらべ、今回は大正から現代まで幅広い作品を扱うことができたため、様々な読書機会に恵まれることができました。また、参加者の研究対象が異なることもあり、同じ作品を扱うにしてもそれぞれ着眼点や問題意識が違うために活発な議論をすることができ、普段一人の読書では得ることができない問題意識を持つことができるようになりました。

上記の作品のうち、遠藤周作『死海のほとり』に関しては大塩が日本キリスト教文学会関西支部冬季大会での発表に向けて、予行練習という形で発表をさせていただきました。本研究会でいただいたご意見を発表内容に反映させ、無事に発表を終えることができました。

また、住野よる「君の膵臓をたべたい」に関しても、参加者の西貝怜さんが論文執筆に向けご発表くださいました。西貝さんは論文「分からない他者をめぐる名前の詩学――住野よる「君の膵臓をたべたい」論――」（「中央学院大学現代教養論叢」第５巻（第２号）、2023 年３月）を発表されました。このように、毎週の小さな議論が成果として結実したことを大変うれしく思います。

その他の作品は特に発表者を設けずに参加者が提案した作品を自由討論したものです。ですので、ご参加を検討されている方の中で現在論文執筆をしていない方でも、文学作品に触れる機会として、また論文を書き始める機会として、ぜひお気軽に研究会をご活用いただきたいと思います。もちろん修士課程や博士課程に在籍中の方も歓迎いたします。

研究会は毎週土曜日 15 時からで、毎回約１時間半のオンライン研究会を行っています。隔週でのご参加、長期休み中のみのご参加などでも構いません。参加を希望される方は今後の予定や Zoom の URL をお送りしますので、大塩までご連絡ください。

[redacted]

（本センター研究員　大塩　香織）

『ちくま日本文学』（002 芥川龍之介、003 宮沢賢治、011 泉鏡花、031 夢野久作）

プロジェクト活動報告②

フランス語教育研究会

小学生のためのフランス語教室「プチテコ・プランタン」

2023年3月4日（土）・5日（日）

去る３月４日（土）と５日（日）、小学生のためのフランス語教室「プチテコ・プランタン」が開催されました。コロナ禍以前、最後の対面開催は 2019 年度であり、2020 年度はオンライン開催、一昨年度と昨年度はコロナ感染拡大防止のために対面開催を見送ることとなりました。フランス語で「春」を意味する「プランタン（printemps）」という名前の通り、久しぶりの対面開催は、冬の間の長い時間を経てやっと訪れた春を感じさせてくれました。

「プチテコ」は、フランス語フランス文学科に所属する学生有志が学年を超えて共同で企画する年に一度のイベント教室です。小学生に英語以外の外国語を触れさせる機会を提供すると同時に、学生たち自身にとっても日常で学んでいるフランス語やフランス文化を小学生に教えることのできる貴重な機会でもあります。

私はフランス語フランス文専攻の修士課程で、「プチテコ」を研究テーマとして取り組んでいました。研究仮説を検証するために実験的な教室を開催したいと考えていましたが、2020 年度は世界中でコロナ禍が広がり、大学での研究も制限されました。そのため、オンライン教室を開催することになりました。オンラインでの教室では、子どもたちの表情がよく分かり、一人ひとりに丁寧に対応できるといった利点がありましたが、私自身は「もっと身体を動かしたい」「みんなで声を合わせて大きな声で歌いたい」という思いが残りました。ですので、今回「プチテコ・プランタン」にお招きいただき、子どもたちと学生スタッフと一緒に非常に有意義な２日間を過ごすことができました。

今年のテーマはイースター（Pâque）。教室会場のクララホールは色とりどりのお花やたまご、うさぎでかわいらしく飾られていました。最初は緊張していた学生スタッフと子どもたちも、クイズや歌、劇の練習を経て、「たまごさがしゲーム」の時間には打ち解け、楽しそうに過ごしていました。２日目の最後に保護者の方々の前で行われた発表会も大成功です。

今年の「プチテコ」の企画は昨年度に考えられたものでした。昨年度参加できなかった学生スタッフたちの思いを受け継ぎ、新たな学生スタッフたちが素晴らしいイベント教室にしてくれました。「プチテコ」はたった２日間の開催ですが、私にとってはみんなでアイデアを出し合いながら丁寧に準備を進める貴重な機会でした。今回参加した学生たちも、誰かの笑顔のために入念な準備をすることの大切さを感じてくれたら嬉しいです。

（本センター準研究員　荒井　久美子）

イースター（Pâque）に関するクイズを出題中。

白雪姫（Blanche-Neige et les nains）のフランス語劇にも挑戦しました。

プロジェクト活動報告③

2023 年度　第 1 回

英語圏文化・文学コロキアム

2023年5月29日（月）16:30～18:00

言語・文学研究センターの所員である皆様方には御承知のことかとは思われますが、本センターにおいては現在 4 つの「研究プロジェクト」が制度化されております。その 1 つを成すプロジェクトの名称が「英語圏文化・文学コロキアム」です。当該プロジェクトの今年度における「責任者」として、英語英文学科教員の米田より、この場を借りましてコロキアムの活動報告をさせていただきたく存じます。

2017 年 12 月 6 日に行われた研究会を最後に、長らく活動休止となっていた英語圏文化・文学コロキアムは、本年の 5 月 29 日に行われた研究会を以って正式に活動再開の運びとなりました。過去にコロキアムの運営に携わっていた教員・院生の多くがすでに退職・修了して本学を去っており、当時の運営マニュアルが受け継がれないままにプロジェクトの世代交代を迎えた現状を鑑みまして、今回の研究会につきましては、準備の段階から滞りなく進められることを理由として、参加資格を責任者の所属学科と関係の深い以下のセンター所員に限らせていただきました。

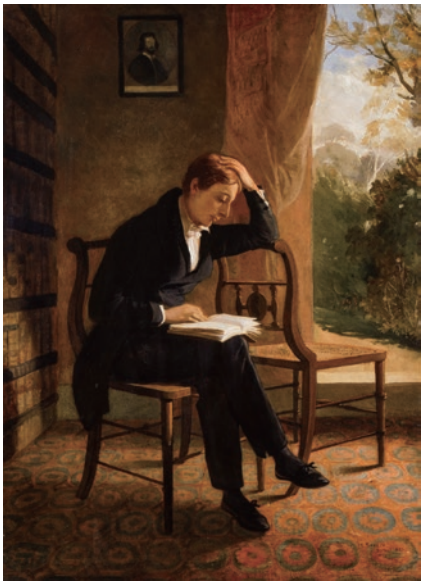
[1] 英語英文学科の専任教員
[2] 英語英文学科の特別専任教員
[3] 英米文学専攻（修士課程）の学生
[4] 言語・文学専攻（博士課程・後期）の内、英語学・英米文学文化・比較文化文学分野の学生
[5] 過去に［3］か［4］であった者で、且つ、現在の委嘱研究員か、研究員か、準研究員である者

結果として、研究会当日の参加者は、[1] が 5 名（責任者を含む）、[4] が 1 名、合計 6 名となりました。少人数ながらも教員と院生とが共に参加できたことは、本センターにおける学術交流のイベントとして、少なからず有意義であったと思っております。

プロジェクトの再始動を記念すべき今回の研究会で、発表を担当してくださったのは、英語英文学科の水越あゆみ教授です。“Engendering Literary Value: Keats, Classicism and Canonisation” と題された発表においては、イギリス・ロマン主義時代の詩人であるジョン・キーツ（John Keats, 1795-1821）の代表的な作品を題材にして、「文学的価値（literary value）というものは、いかにしてジェンダー（gender）によって生み出される（engenderされる）のだろうか？」、この問いかけに始まる大変興味深いお話を聞くことができました。参加者の各々が、水越先生のハンドアウトに抜粋されたキーツの詩を分析し、各自の専門分野からの知見を交えて批判的に意見交換を重ねることで、終始議論の絶えない活気に満ち溢れる研究会となりました。私自身、コロキアムの復活と存続に、責任者として大きな手応えを感じているところです。

今後の活動につきましては、今回のような小規模の研究会を定期的に開催し、英語英文学科の専任教員が中心となって持ち回りで発表を担当していく予定です。プロジェクトの運営が軌道に乗った暁には、参加資格の範囲を拡大し、学内外の教員にも、院生にも、広く開かれたコロキアムを目指したいと思っています。センター所員の皆様方におかれましては、長年にわたる活動休止の末に世代交代を経て復活した英語圏文化・文学コロキアムの存続と発展を、どうか温かい目でお見守りいただけましたなら幸甚の至りでございます。

（英語英文学科准教授　米田　ローレンス正和）



※「古典籍の会」活動報告はお休みいたします。

「知の散歩道」が新しくなります

講演者
大募集中！

2004 年より例年、杉並区立中央図書館と言語・文学研究センターが共同開催し、杉並区にお住まいの方々にも親しまれてきた文化講座「知の散歩道」。
20 年の節目を前に、今年、「知の散歩道」が新しく生まれ変わります。

センター員のみなさまで、
学外で開催するイベントにご興味がある方、
研究発表の場を探している方、
ぜひ「知の散歩道」でお話ししてみませんか。

講演テーマは自由。
ご自身の研究内容について、好きな作家・作品について、
文化、食、ファッション、アート、旅…etc.

講演スタイルも自由。
トークセッション、対談、ワークショップ、
パネルディスカッション、グループ発表…etc.

お気軽にご相談ください❀

●講演会場　杉並区立中央図書館
地下ホール
●日時　ご相談ください。
●講演時間　例年２時間です。
（質疑応答を含む）

「こんなテーマのお話を聴いてみたい！」
というリクエストも随時募集中です。
みなさまのご意見をお聞かせください。

詳しくは言語・文学研究センターまで
☞ 本学１号館２階 1207 教室左隣
TEL : 03-3326-5294
MAIL : gbkc@shirayuri.ac.jp

白百合女子大学言語・文学研究センター　編

アウリオン叢書

ご希望の方は言語・文学研究センターまで

【最新刊】

【既刊】

1	国境なき文学	澤田直　責任編集
2	文学と食	久保田淳　責任編集
3	口承文学の世界	春田節子　責任編集
4	翻訳の地平―フランス編	星埜守之、澤田直　責任編集
5	文学と笑い	星埜守之、井上隆史　責任編集
6	人間と動物をめぐるメタファー	朝日由紀子　責任編集
7	宗教と文学――神道・仏教・キリスト教	井上隆史　責任編集
8	映画と文学	川竹ジョジアーヌ、福田耕介　責任編集
9	語学・文学研究の現在 I	室城秀之　責任編集
10	語学・文学研究の現在 II	室城秀之　責任編集
11	異文化の中の日本文学	海老根龍介、福田耕介　責任編集
12	書物の現場	篠田勝英　責任編集

The Shirayuri Research Center for Language and Literature アウリオン
Αυριον
July 2023 Vol.41

発行：白百合女子大学　言語・文学研究センター
〒182-8525　東京都調布市緑ヶ丘 1-25
TEL/FAX　03-3326-5294（直通）
E-mail　gbkc@shirayuri.ac.jp